

後ろに源ちゃんが来ていた。源ちゃんは、あせだらけになって、かたからかばんをかけてぼかんと立っていた。源ちゃんの家は八幡さまとは反対の東の方の「大東」というところで、学校から一番遠いところだ。きっと家に帰らずそのままこっちに来たのだろう。もち投げに間に合いたいと思ってかけどおしに来たにちがいない。でも、源ちゃんはひとつも拾っていなかった。ぼくは思わず源ちゃんのをばに行った。そして、拾ったもちの半分をそつと源ちゃんの両手にのせた。源ちゃんはきよんとしていたが、やがてきまり悪そうにこつとした。

源ちゃんのズックぐつのまわりには、うさぎのふんがこびりついていた。



25 弘ひろしの日曜日

五年生では、五月になると、理科の授業でめだかの観察があった。

「だれか、めだかを持ってきてくれる人はいませんか。」

と、たずねられたので、弘は、

「はい先生、ぼくが持ってきます。」

と大きな声で答えた。

帰り道、弘は正志に、

「明日、めだかとりに行くけん、正志君もいっしょに行けへんか。」



とたずねた。

「うん、でも明日はお母さんと買い物に行くけんあかんけど、日曜日だったら行けるわ。」

と、正志が答えたので、弘は、

「ほな、日曜日の昼ごはんを食べてから行こう。健君や安夫君にも連れらくして、ぼくがさそいに行くけんな。」

と言って別れた。

そして、日曜日の午後、弘たちは四人で、めだかとりに出かけた。

そこは、弘の家から自転車で四十分ほど行った岬町の小川で、生活はい水の流れる下流ではあるが、四、五才のころ、父母とめだかとりをした場所であった。弘は土手に、たんぼぼやれんげがさいていたことを覚えている。しかし、その後、一度も行ったことがなかったので、今も昔の自然が残されているのか、また、めだかたちも元気であるのかという不安な気持ちで、自転車を走らせた。

まもなく目的地についた。その場所は、整備工事が行われ、みちがえるほどきれいになっていた。小川のふちには、農家の人たちの発案で、花街道の立て札があり、いろいろな花がさき乱れ、地いきの人たちの自然を守り、大切にすゝる心が感じられた。そして、めだかや小さな生物が元気よく泳いでいたので、弘の不安もいっしゅんのうちにふきとんでしまった。

「ようけ泳んぎようなあ。がんばって、いっばいすくわんか。」

弘のかけ声のもとに、みんなめいめいにあみですくい始めた。だが、花が気にかかってしまい、何回やってもうまくすくえなかった。

「くそう。こうなったら、中に入ってすくわんか。」
と、弘が言った。

花畑は、百五十メートルぐらい続いており、四人は花のさいてない間から中へ入っていった。さつき



とはちがって、花を気にしなくてもいいので、とてもすくいやすそうな感じがした。

めだかが近づいたしゆんかんに、さつとあみを引き上げた。

すると、一ぴき入っていた。

「やったあ。ついにすくったぞ。」

と、弘は思わずさげんでしまった。

めだかとりが始まって二十分ほどたったこ

ろ、花畑の方から子どもたちの声がしてきた。

見上げると、五、六人の小さな子どもたちが

弘たちを見ていた。

「めだかとりよん。ぼくらも入れて。」

というなり、二、三人が入ろうとしたので、

「入ったらあぶないよ。後であげるけん、上で

ちゃんと待っとりよ。」

弘たちは、そう言ってまた、めだかをとり始

めた。

ところが、めだかも用心深くなり、悪戦苦と

うすることになってしまった。そのため、弘た

ちは、小さな子どもたちがめだかを追って、花

畑の中へ入ったり、周りで遊んだりしていたこ

とも、花をいためたまま帰ってしまったことに

も気がつかなかった。そのとき、農家の人たちが近くを通りかかり、めだかと

りをしてる弘たちの方を見ながら通りすぎていった。

一時間ほどたち、めだかが二十匹ほどとれていたの、岸が上がってみると、小さな子どもたちのすがたはなく、花畑がふみあらされていたことに気がつい





た。それを見た弘たちは、花が泣いているように思えた。

「ようけふまれてかわいそうやなあ。気をつけて見よつたらよかったなあ。」

「しようがないわ。いける花だけでもきちんとしてかんか。」

すぐにたおれた花をみんなで起こそうとしてみたが、中には、それでもたおれてしまう花もあった。そこで、弘たちは、あらされた土をならしたり、球根や小さな芽が出ているものにもきちんとして土をかぶせ、植えかえたりもした。これには、めだかをとるよりも時間がかかり、大変な一日のように思えた。

月曜日の朝、学校で、とってきためだかを見せると、みんなは大変喜んでくれた。弘はとてもうれしかったが、内心では、日曜日のことが気になっていた。朝会で、校長先生から、次のようなお話があった。

「今日、少し残念なお話があります。昨日、岬町の小川のふちに植えられていた花をふみあらした人がいます。それが本校の児童らしいという連らくを、農家の人からいただきました。ふんだ人にも、どんなわけがあるかもしれません。が、花にも大切な命があるんですよ。」

弘は、話を聞くにつれて、自分たちがやっていないにせよ、もう少しあのとときに、小さな子どもたちに対する気配りや花に対する思いやりがあれば、花をきずつけることはなかったと、今さらのようにくやまれるのだった。



25 弘の日曜日

3—(1) 自然の偉大さを知り、自然環境を大切に
する。
(自然愛・動植物愛護)

①主題設定の理由

〈ねらいとする価値について〉

身近な自然の中でのびのびと生活することは、子どもの心身の豊かな成長には欠かせない。最近、身近な自然環境を守ろうとする運動がいろいろな形で展開されており、学校においても環境について学ぶことの重要性が強く叫ばれている。

5年生の段階では、これまでの学習・経験からさらに一歩進んで、自然の偉大さを理解し自然に学ぶ態度を身につける必要がある。そして、自然や動植物を愛護しようとする心を育て、自分のできる範囲で自然環境を守ることができるようにしていくことが大切である。

〈子どもの実態について〉

高学年になり、教科学習や委員会活動、ボランティア活動などを通して、子どもたちは環境保全の大切さを学ぶ機会を多くもっている。

子どもたちの生活を見ていると、小さな生き物の世話をしたり草花を育てたりして、それらをつくしむ心が育ってきている子もいる。

そこで、一人一人が自分の生活を見つめ直

し、環境を守るために自分たちにできることを考え実践していこうとする意欲を育てたい。

〈資料について〉

弘は、学級で理科の授業に使うめだかをとりに、親友と4人で岬町の小川へ出かけた。その場所は整備されており、小川のふちには花が植えられ、大切に育てられていた。


弘たちがめだかをすくうのに夢中になっている間に、小さい子どもたちがその花畑をあらしていた。自分たちの気配りが足りなかったことを反省した弘たちは、いっしょうけんめいに直そうとした。そして、翌日の朝会で校長先生の話聞き、自然を大切にすることを大切にする心をもつことの大切さにあらためて気づいたという資料である。

踏みあらされた花畑をいっしょうけんめいに直している弘たちの姿や校長先生の話から、自分たちの生活を振り返り、自然環境を守っていこうとする心情を育てたい。

②ねらい

自然の偉大さを理解し、自然環境を大切にしようとする心情を育てる。

(弘の顔を移していく)




自然に
対する
思いやり

自分たちに
できることを

踏みあらされた
花畑の絵


・ ぼくたちにも責任がある
たおれた花を起こそう



弘の日曜日

夢中でめだかを
すくっている絵

・ うわあ、ひどい。
・ 花が泣いているようだ。
・ 育てている人が悲しむだろう。
・ 自分たちがちゃんと注意して
いたらよかった。
・ いける花だけでもきょうんとして
よう。



弘

花があるから、川の中へ入って
すくおう。
・ いっぱいいるなあ。
・ たくさんすくって、学級のみ
んなに喜んでもらおう。
・ 小さい子たち……危ないから
上で待っていて。

□板書

③展開

| 学 習 活 動 | 支 援 上 の 留 意 点 |
|--|---|
| <p>(1) めだかをとりに行った経験やそのときに思ったことなどを発表する。</p> <ul style="list-style-type: none"> ○ みなさんはめだかをとりに行ったことはありますか。そのとき、どんなことを思いましたか。 <p>(2) 資料「弘の日曜日」を読み、弘のしたことや気持ちについて話し合う。</p> <p>① 資料を読んで感じたことを発表しましょう。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 弘は、自分たちがしていないのに花畑を直そうとがんばったのはえらい。 ・ 自分だったら、たおれた花をそのままにして帰ってしまうだろう。 <p>② 夢中でめだかをすくっているとき、弘はどんな気持ちだったでしょう。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ うわあ、いっぱいいるぞ。 ・ たくさんすくって学級のみんなに喜んでもらいたい。 <p>③ 上に上がって花畑が踏みあらされているのを見て、弘はどんな気持ちでたおれた花を起こしたのでしょうか。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ さっきの小さい子どもたちがしたんだろう。ちゃんと見ていたらよかった。 ・ 地域の人たちは大切に育てているから、あらされているのを知ったらがっかりするだろう。 ・ 自分たちで直せるところまで直してみよう。 <p>④ 朝会で校長先生のお話を聞いているとき、弘はどんなことを考えたでしょう。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 花畑をあらしたのは小さい子どもたちだけど、自分たちにも責任はある。 ・ 花畑を大切に思う心があれば、小さい子どもたちにもっと気配りができたのに。 | <ul style="list-style-type: none"> ・ めだかをとりに行った場所やつかまえたときの楽しさなどを発表し合い、資料への関心が高まるようにする。 ・ 自分たちがしていないにもかかわらず、たおれた花を起こそうと努力した弘たちの行為に目を向けることができるようにする。 ・ めだかをすくうのに夢中になり、足元の花のことや小さい子どもたちの行動を忘れてしまっている弘の気持ちに気付くことができるようにする。 ・ 無残に踏みあらされた花畑を見た驚きと、自分たちの配慮が足りなかったために起きたという反省の気持ちから、弘たちが一生懸命に花を起こそうとがんばった姿をしっかりとりえることができるようにする。 ・ 地域の人たちの自然を大切に思う心が自分にもあったら、小さい子たちの行為は止められたのにと深く反省する弘の気持ちに共感できるようにする。 ・ 自分たちも自然を大切にすることをもち、小さなことでよいから、実践していこうとする意欲が高まるようにする。 (心のノート P60・61) ・ 動植物も人間も自然の中でかわり合いながらともに生きていることを話し、実践への意欲を高めることができるようにする。 |
| <p>(3) 自分自身の生活を振り返る。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 家の人といっしょに、近くの公園の草取りに参加し、がんばってきれいにした。 ・ まわりの自然を汚したりいためたりしないように、自分もがんばっていきたい。 ・ このお話や社会科などで学習したことを生かして、自分たちにできることをみんなで考えていききたい。 <p>(4) 教師の話聞く。</p> | |